

Title	他者の動機を語るということ : 子どもの犯罪をめぐる言葉の布置についての一考察
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2006
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.11 (2006.) ,p.49- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 子どもたちと他者 : コミュニケーションの変貌と現代社会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

他者の動機を語るということ

——子どもの犯罪をめぐる言葉の布置についての—考察——

鈴木 智之

<他者>を「存在させる」ためには、語りの関係が必要とされる。

(E.レヴィナス『全体性と無限』)

1. 問いの輪郭

それでもなお、動機こそが問われねばならないのではないか。動機を、私たちの視点から（つまりは他者の視点から）、手持ちの言葉で、直截に語らねばならないのではないだろうか。そんな漠然とした思いに端を発して、以下の論考は書き進められる。

ここで、さしあたり念頭においているのは、マス・メディアの報道を通じて私たちに伝えられる子どもたちの犯罪、しばしば「不可解な」、「わけのわからない」ものとして語られる殺人や暴力行為である。そのたびに「なぜ？」という問いが発せられ、「動機の究明が急がれる」という決まり文句がくりかえされる。けれども、その請求は素直に答えを導くというよりもむしろ、「了解不能」という印象を呼び起こすためのレトリックとして機能するように見える。「わからない」という答えを引き出すための問い。「常識的」な答え方とは別様の推論を呼び出すための問い。しかし実は、その「不可解」という共通了解こそ、信用のおけない約束事なのではないか。少なくとも、それとは異なる、つまりは再び「常識的」な答えに立ち戻ることを可能にする方法があるのではないか。これが、私の中にぼんやりと浮かび上がる問いの輪郭である。

「わけがわからない」ということ、「了解不能」であるということ。それこそが今日の「少年犯罪」を「問題」として認知させる重要な一要因であることは、すでに多くの論者によって指摘されている¹⁾。

例えば土井隆義は、『<非行少年>の消滅』（2003年）において、統計的資料からは「重大な少年犯罪の増加」を確認しえないにもかかわらず、「少年犯罪の凶悪化」言説が流通しつづけるのはなぜかを問い、これに対して、「少年犯罪は凶悪化していない」という情報とは「認知的不協和」をひき起こすような質が、報道される諸事件に感受されるからである、と説明する。その認知的要素とは、最近の少年犯罪の「わけのわからなさ」、すなわち「従来の枠組では犯行の背景や動機を理解しがたい」（土井2003:27）と思わせるような何かである。「わけのわからないもの」を前にした不安が、「凶悪化」という語りをうながし、それを支持させることになる、というのである。

確かに、報道される諸事件を前にして、とりわけ「子ども」による犯罪について、私たちはしば

しば「わけがわからない」と感じ、そう口にする。学園祭中止を要求する自殺予告の電話をかけ、「理由なんてありません、ぼんやりと、しかし決定的にいやなんです」と語る少年（山口県、1996年）、「人間の壊れやすさを確かめるために」通りすがりの少女に金槌をふりおろす少年（「神戸連続少年殺傷事件」1996年）。見ず知らずの他人の家に押し入り、その家の主婦を殺害し、「人を殺す経験をしたかった」と供述する少年（「豊川主婦殺害事件」2000年）。こうしたふるまいを前にして、「常識的理解を超えている」と判断するのは、決して理由のないことではない。そして、土井が指摘するように、私たちの不安は、しばしばこの了解不能性に向けられている。

しかし、もう一步退いて考えてみれば、「従来の犯罪動機の説明の枠組」からはすぐに理解されえないということと、その行為が了解不能であるということのあいだにはわずかな隔りがある。にもかかわらず私たちは、あまりにもたやすく「理解できない」と決めつけ、「わけがわからない」という言葉を発しつつける。そして、その「わからない」という語りが、「了解不能」であることを「共通了解」として確立させていくようにも思われるのである。

例えば、あるルポ・ライターは、「酒鬼薔薇聖斗」や「麻原彰晃」や「宅間守」らの事件について「人格障害」という言葉がどのように用いられてきたのかをたどって見せた上で、長崎県佐世保市で起きた「同級生殺害事件」（2004年）に言及し、次のように書く。

「臨床における人格障害」というテーマで僕が取材しているあいだに、世間では小六の少女による小六の少女の殺人というものが起こり、議論がかまびすしい。（・・・）

この事件は、「佐世保小六同級生殺人事件」と呼ばれている。何で小学生の女の子が小学生の女の子を殺さなくちゃならないのか、というのがみんなわからない。もちろん僕にもよくわからない。そんなわけのわからない事件が、次から次へと起こる。まるで事件がメディアに向かって、「じゃあ今度はこれね。ふーんそう解釈するわけ。じゃあ次はこれね。今度こそわからないでしょう。どうよ、説明してみなさいよ」なんて言っているような感じである。（大泉 2005：243，強調引用者）

「宅間守」に対してはその暴力性に「共振」するものを感じるとまで語っておきながら、この筆者は、「佐世保の事件」についてはしごくあっさり、「みんなわからない」「もちろん僕にもよくわからない」と断定する。そこには「わかるかもしれない」という疑念も、「わかろうとする」意思も感じられない。はじめから「わからない」に決まっているかのようなのである。しかし、ことはそれほど自明だろうか。

こうしたナイーヴな問いを投げかけることで、私は、「わかろうとすればわかるのだ」とか、みんな「わからないことにしているのだ」といった主張をしたいわけではない。そうではなく、ある他者の行為が「わからない」とはどのような出来事なのか。ある行為を「わからない」ものとして伝える時、言葉はどのように機能しているのか。他者の行為について「わからない」と語ることで、私たちは何をしているのか。「わかる／わからない」主体と「わかられる／わかれられない」主体との

あいだに、どのような関係が結ばれるのか。その関係に別様の可能性はないのか。これを今一度考え直してみたいと思うのである。

2. 動機の語彙とその機能不全

こうした問いを立ててみた時に私たちが参照することのできる理論枠組は、ひとまずチャールズ・ライト・ミルズの「動機の語彙論」に求められる。

周知のようにミルズは、「状況化された行為と動機の語彙」(1940→1963)や、H.ガースとの共著『性格と社会構造』(1953)において、動機を、人々がたがいの行為を理解可能なものにするために用いる言語的表現として位置づけていく。それによれば、動機は、社会関係に先立って「個人の『内部に』固着した要素」(Gerth&Mils 1953=1970: 345)としてではなく、行為者や観察者が「行為の適切な理由」として付与していく言葉として考察されねばならない。社会生活の中で人々は、自分や他人の行為の理由を、適切な用語によって、他者たちにとっても「わかる」ものとして提示することを求められる。この言語的理解やコミュニケーションの中で構成される「行為のもくろみの納得のいく正当化」(Mils 1963=1971: 131)こそが動機なのである。

そして、この動機のコミュニケーションに動員することのできる言語表現のヴァリエーションが、それぞれの社会集団ごとに、限定された形で準備されている、とミルズはいう。人々はこの言葉を習得し、その適切な使用法を学ぶことを通じて、状況ごとに、行為を理解可能な出来事として提示する術を身につけていく。「動機というものは、ひとつの限られた社会的状況のなかで、さまざまな事実を確定させる機能をもつ象徴的な語彙」(ibid.: 345)に他ならない。

「動機の言語的性格」に着目したこのミルズの視点は、一方において、「実際に行為を引き起こした理由」——「本当の動機」——から切り離して動機表現を考察することを可能にする。しばしば人々は、社会生活の中で、それぞれの(自己や他者の)行為を理解可能なものとして記述するという課題を負う。この「説明可能性 accountability」の確保という水準だけに照準化してみれば、行為の「本当の理由」がどこにあるのかという問いとは切り離して、動機の言説的な構成だけを問題にすることができる(そこでは、言い訳も、弁明も、事後的な解釈も、嘘も、コミュニケーションの重要な要素となりうる)。

しかし、ミルズの議論は、必ずしもこの動機をめぐる言表——モーティヴ・トーク——にのみ視点を置いているわけではない。他方において、「動機の語彙論」は、行為を導く理由そのものを、相互作用に先立つ個人的な事実としてではなく、社会的関係性の中におくこと、すなわちあらかじめ伝達可能性を織り込んで形成されるコミュニケーションの一要素として見ることを可能にする。ミルズによれば、「動機の語彙」は、単に人々に向けて行為を説明するために用いられるだけではなく、行為者がその言葉を内面に取り込み、自分自身との対話を通じて、その理由を構成していく上でも重要な要素となる。そこでは、動機表現のために使用されうる語彙を通じて、「他者の判断」が先取りされ、これにそって行為が調整されていくのである。ミルズは、言葉を媒介として行為主体の内面に取り込まれていくこの他者の視点を、ミードの言葉を借りて「一般化された他者」と呼んでい

る。

このように、ミルズの視点からは、行為の言語的要素としての動機に二つの機能が見いだされる。ひとつは、行為を、社会関係の中で、「理解可能」なものとして構成する機能（コミュニケーションの機能）。そしてもうひとつは、「一般化された他者」の判断を先取りして、行為を規範的に制御していく機能（社会統制の機能）である。言語的な構造をもった動機を形作ることで、私たちは自己の内面を、「他者によって理解可能な」ものとして造形し、その同じ作業の中で、言語媒介的に呼び込まれた他者の判断が、自己の規範的な統制能力の基準をなしていくのである。

ここに認識される「動機の語彙」の二面的な働きを念頭において見れば、私たちが冒頭に掲げた問いも、「言葉の機能」の問題としてとらえ返すことが可能になるだろう。すなわち、子どもたちの犯罪が、しばしば「了解不能」に見えるとすれば、それはその子どもと周囲をとりまく人々——マス・メディアを介して接する人間も含めた——のあいだに、「動機の伝達」を可能にするような「語彙」が準備されていないからであり、それゆえに「子ども」たちもまた、他者のまなざしに準拠して、その規範的な期待に応答する形で——従うにせよ、背くにせよ——行為を整形することができなくなっているからである、と。

土井隆義が、「<不良少年>の消滅」という表現に集約した仮説も、おおむねこの二重の視点に沿って提示されている。それによれば、「わけがわからない」と認知されるような「少年犯罪」の頻出の背景には、独自の文化をもった<不良少年>グループの衰退と、これにともなう犯罪の「脱集団化」の傾向がある。かつて「非行少年」たちが形成していたグループは、単に犯罪の手口や手段を伝授するだけではなく、そのメンバーとなる少年たちのうちに、「反社会的態度や信念の確立を促す」ものでもあった。彼らの「非行サブカルチャー」の中で、少年たちの行為には固有の規則と文法が与えられ、「逸脱」は「逸脱」なりの「意味」を伝えることが可能になっていたのである。ところが近年、「非行グループが成立しにくくな」り、「往年のようなサブカルチャーを少年が学ぶ機会」(op.cit.:37)がそれだけ減少することになった。その結果として、少年たちの暴力行為はまったく組織化されず、「個人的でアナーキーな行為」へと変貌していくことになる。行為を理由づけ、これを理解可能なものへと仕立てあげていくノウハウをもたない子どもたちの行為は、「短絡的」または「衝動的」なものとして現出するようになる。「衝動的な身体感覚」にのみ動かされて、これを「動機」へと変換するだけの言葉をもたない子どもたち。行為の理由を伝達し、解釈し、了解するための「語彙」の不在が、「わけのわからない」犯罪を頻出させるのである。

この認識を前提におくとすれば、「動機を究明せよ」という要請それ自身が、「ありもしないものを差し出せ」というかのような無理をはらんだものとして見えてくるだろう。ミルズの視点に立てば、動機とは、他者あるいは自分自身との対話の中で形づくられる「言語的構築物」であるが、この動機形成の過程はすべての行動に付随するものではなく、行為の「意味づけ」や「理由づけ」に一定の負荷が課せられる時のみうながされるものである。例えば、ある行為のもたらす「帰結の重さ」と「(提示可能な)理由の重さ」のバランスを量ってみる。そこにアンバランスがあれば、その行為の正当化が一種の課題として認識される。動機は、このような認知的ないし道徳的緊張が生

じた時にはじめて必要となるのである。

これに対して、土井が指摘したような「サブカルチャー」が学習されない状況では、動機を呼び起こすだけの緊張をともなった言語過程そのものが生起しない。したがって、「動機の語彙」が介入することなく、行為が惹起されてしまうのである。そうであるとすれば、行為主体の内面に「探し出されるべき動機」を想定し、これを解明しようとするふりまは、もとより虚しい詮索に終始することになるだろう。したがって今や、「動機の探索には意味がない」²⁾ ということができる。

確かに、動機の形成そのものに意味を与えるような環境が欠落しているのであれば、その中で、行為を呼び起こした「原因」を個々の主体のうちに探ってみても、空転をくりかえすばかりである。その空回りの連続は、結局のところ「了解不能」という印象を強化し、反転して、動機それ自体の追求ではなく、その背後にあるものを解明する新たな知識の動員を要求することになる。他者の行為を了解することではなく、「わけがわからない」ものが出現したのは何故かを説明することが賭け金となり、この課題を担うために、典型的には心理学や精神病理学の概念が呼び込まれていくのである。

こうした犯罪をめぐる言説の「心理学化」や「医療化」に抗してなされるべきひとつの作業は、確かに、その「条件の不在」を生んだ「原因」についての社会学的考察にある。しかし、それだけで十分なのだろうか。

ミルズの考え方を延長していくならば、そこに欠落しているものは、まず何よりも人々がたがいの行為を了解可能なものへと整形していく言語・文化的な過程である。とすれば、すでに指摘されるように、その「コミュニケーションの基盤」(宮台→岡崎・保坂 2005)の回復こそが求められねばならないだろう。そして、そのためにはもちろん、「言葉」だけではなく、生活全体をとりまく環境の整備から手をつけねばならない。しかし、他者の行為を理解するという営みは、ひとつの(または複数の)引き金がそのつどひとつの行為に結びつく、その偶発的な過程に向けられざるをえない。その限りでは、個別の状況と行為の結びつきに言葉を与えていく試み——あえて動機を語るということ——もまた、継続されねばならないはずである。

3. 動機を問い求める言葉

こうした問いを念頭において、ひとつの「事件」と、これをめぐって発せられる「言葉」についての考察を進めてみたい。

ここで「ケース」としてとりあげるのは、小学校六年生の児童が学校で同級生の少女をカッターナイフを用いて切り殺してしまった、という出来事である。「佐世保同級生殺害事件」(2004年6月)と呼ばれるこの事件が、その年齢にもなうスキャンダル効果とともに大きく報道され、子ども全体にかかわるある種の問題を象徴するものとして論じられたことは、まだ記憶に新しい。

そして、この「11歳の凶行」についても、その犯行の理由はしばしば了解しきれないものとして位置づけられ、その先にさらなる解明を要求する声があげられてきた。例えば、ひとりの「報道人」が示す、次のような言葉。

「11 歳の凶行」の衝撃はとてつもなく大きかった。しかも、同級生が被害者。学校関係者で取材に応じてくれる人は数えるほどしかいなかった。事実の「空白」が埋まらず、もどかしい取材だった。

真相はまだ見えてこないが、親友とされた怜美さんと女兒にさまざまなトラブルが積み重なったことは、ほぼ間違いない。

だが、核心に迫るには、まだわからないことが多すぎる。女兒の心に芽生えた殺意の源をたどらなければならない。

報道の過程で、怜美さんが女兒を中傷したという話を書かなければならなかったのも、つらかった。でも「事実」を重ねることによってしか真相は解けない。

「なぜ怜美を殺さなければならなかったのか」。御手洗さんは 14 日に出したコメントで、究明を求めた。私も「報道人」として、小学生の子供を持つ親として、それを知りたい。

(読売新聞、2004 年 6 月 16 日)

「真相」、「核心」、「女兒の心に芽生えた殺意の源」。こうした一連の言葉遣いは、行為の起源となる「心的な現実」を、ある「深さ」の中に想定し、結果としてそれを「まだ見えていない」、「まだわからない」何かとして、さらなる解明の対象に位置づけていく。では、ここで追い求められている「真相」は、どのようなまなざしのもとに「究明」されていくのだろうか。

司法的判断に援用される精神鑑定などの手続きは、この「空白」を埋めるための有力な語彙を提供する。心理学や精神医学の言葉は「まだ解けない真相」に迫るための有力な手段として人々の語りの中に取り込まれ、反復されていく。「なぜ、少女は人を殺してしまったのか」を問う次のような新聞記事に、その一例を見ることができる。

なぜ、少女は人を殺してしまったのか。

精神鑑定などを踏まえた家裁の決定からは、「他者の視点に立って感情や考えを想像し共感する力や、他者と親密な関係をつくる力が育っていない」と、コミュニケーション能力の欠如が浮かび上がる。

情緒面からは「怒りを回避するか、相手を攻撃して発散する両極端な対処しかできない」と、偏りが見られる。

人間関係を円滑に築く能力や、感情を適切にコントロールする能力を身に付けるのに、大きな役割を果たすのは、親であり家族だ。

少女は幼児期から泣くこと、甘えることが少なく、一人でおもちゃで遊んだり、テレビを見て過ごすことが多かったという。

両親はそれを「育てやすい子」ととらえ、欲求や感情を積極的に受け止めてこなかった。

他者に自分という存在を受け止めてもらった体験が決定的に少なかったことが、人格形成に影響

を落としている。

しかし、これら人格上の特性も、友人を殺すという重大な事件との間には、まだギャップがある。逆に多くの子どもが、同様の「危うさ」を抱えているのではと感じる。

被害者の父親は家裁の決定を受け、「子どものすべては理解できないと分かった上で、理解する努力を続けてください。それぞれの家がそれぞれのやり方で」と手記を寄せている。

大人が子どもと真剣に向き合うことで「溝」を埋めていくしかない。

(『沖縄タイムス』2004年9月17日)

ここでは記者が、精神鑑定結果にもとづく家裁の判断を引用して、この事件を、「コミュニケーション能力」「人間関係を円滑に築く能力」「感情を適切にコントロールする能力」の問題としてとらえている。そして、その能力の欠如は、「生育過程」における「受容経験の欠落」に帰属させられる。では、こうした心理学的な言説の援用は、「なぜ？」という問いにどこまで答えを与えているのだろうか。

この記事の執筆者は、「これら人格上の特性」と「友人を殺す」という行為のあいだには、まだ「ギャップ」があると認め、それゆえに(=特異な人格特性に帰属させきれないがゆえに)「多くの子どもが同様の『危うさ』を抱えているのでは」ないかと、推論を反転させる。しかし、そこに見えてきた「溝」を埋めるための言葉は提示されない。

こうした一連の報道言説は、その書き手の意図の如何にかかわらず、ひとつの構図の上に反復されていくように思われる。それは、「犯行」に及んだ子どもの「心」を解き明かされるべき「謎」と見なし、これを追究する言葉の動員を求め、しかしその先に「いまだ明らかにされていない暗部」の存在を申し立てる、という展開をくりかえす。これによって、「凶行」の主体の「心」を解説するそぶりを見せながら、その「不可解な」部分をたえず先送りの残していく。しかし、「心の闇」を再生産していくこうした定型的修辭の反復とは別様に、出来事を語る術はないのだろうか。

ここで私たちは、こうした言説構成の中で、何が問われぬままになっているのか、動員された言葉が何に答え損なっているのかをあらためて考えてみよう。

ひとつの手がかりとして、この事件の被害者の父親である御手洗恭二さんが提出した「意見陳述書」を読み直してみる。2004年8月24日に、長崎家庭裁判所に提出されたこの文章は、やはりくりかえし「なぜ？」という問いを投げかけている。

事件が起きた時から、ずっと一つのことが頭にこびりついています。怜美はなぜ彼女に殺されねばならなかったのか、ということです。

事件後、交換日記やメール、警察への供述などを読みました。知らないことが多くて戸惑うのですが、内容は私の目から見て、そんなに深刻なものに思えません。

人間ですから、感情の行き違いや思い違いが憎しみに変ることは珍しくありません。「いなくな

っちゃえ」と思うこともあるでしょう。でも実際に人を殺すということはたやすいことではありません。その一線を越えるほどの問題が二人の間にあったとは、どうしても理解できないのです。

私は、彼女の心の奥底で何があったのかを知りたいのです。彼女自身が今、語る言葉を持っているかは分かりません。たわいもない理由など聞きたくありません。でも、彼女が人の命を奪うことの意味と、それがもたらす様々な悲劇を認識していたのか、知りたいのです。

「友達だっと思っていた」同級生の女の子に、娘の命を奪われた父親の胸のうちに、「なぜ」という思いが払拭されない——その心中は察してあまりあるものがある。しかし、では、その問いかけに対して、何ごとかを答えることのできる言葉があるとすれば、それはどのような視点から、どのような様式のもとに発せられるものなのだろうか。

加害者の生育環境やその性格特性を語る言葉。

コンピューター媒介的なコミュニケーション様式と人間関係の困難を語る言葉。

確かに、これらもまた、出来事を規定した条件について何らかの「説明」をもたらすにちがいない。しかし、ここで「父親」が求めているものは、そうした「条件的要因」についての知識や情報(だけ)ではなく、子ども達に与えられた状況からひとつの行為が導き出されていく過程それ自体、その行為の時に「彼女の心の奥底」にあったもの、殺人という行為にむけて最後の「一線を越え」てしまうその理由である。F. ドレツキ (Dretske 1988) の言葉を借りれば、行為の「起動原因」——いかなる条件の下で「殺人」がなされたのか——だけではなく、その「構築原因」——その状況下で行われたのがなぜ「殺す」という行為であったのか——が語られねばならない。この「起動原因」を「構築原因」へと導くプロセスをこそ、私たちは「動機」と呼ぶことができるだろう。この意味において「動機」とは、背景やきっかけとなる所与の要因をひとつの行為へと帰結させる過程を、心的な現実として措定し、これを「了解可能」なものとして語る言葉の表現に他ならない。

こうして見れば、「生育環境」や「人格特性」を語る心理学の言葉や、コミュニケーション環境を論じる社会学の言葉は、その精度の問題としてではなく、言葉の様式において、「動機」それ自体を語る力をもたない。一つひとつの行為は、与えられている諸変数の関数として一義的に決定されるわけではなく、それらの諸条件を受けて、(一回ごとの出来事として見れば) 偶発的にひとつのふるまいが選択されることによって、生起するからである。この偶発的で個別的な選択の過程を、なおも了解可能なものとして語る言語的表現として「動機」は構成される。では、個別的な出来事を語りながらなお共同性をもつ——他者に対して開かれた——言葉とはどのようなものなのだろうか。

4. 「ありふれた」「不可解」な出来事

「佐世保事件」として報じられた出来事は、その報道の受け手である私たちにとって、本当に「不可解な」「わけのわからない」ことだったのであろうか。そんな単純な疑問に動機づけられて、大学の教室で学生たちにある問いを投げかけてみたことがある。

そこで受講生に提示されたのは、事件の概要とその背景要因を伝えるいくつかの新聞記事³⁾と、先に見た御手洗恭二さんの「意見陳述書」、そして次のような設問であった。

問い

〔「意見陳述書」の提示〕

この文章の中で御手洗さんは、くりかえし問いを投げかけている。それは、「怜美はなぜ彼女に殺されねばならなかったのか」という問いである。

彼は言う。「実際に人を殺すことはたやすいことではありません。その一線を越えるほどの問題が二人の間にあったとは、どうしても理解できないのです」と。

そして、「彼女（＝加害少女）の心の奥底で何があったのかを知りたいのです」とも。

娘を奪われた「本当の理由」を理解したいという、父親の思いがここにある。

さてしかし、誰かこの思いに応じて、「なぜ」を説明することができるだろうか。これが考えてみたい問題である。

この事件については、殺害のきっかけとなった出来事についても、その行為に影響を与えたと見られる背景的な要因についても、かなりのことが知られている（インターネット上の言葉のやりとりの中で感情的な衝突が生じたこと。テレビドラマや映画が犯行のきっかけのひとつとなったということ。加害者の少女がクラス全体の雰囲気にある種の閉塞感を抱いていたこと、など）。御手洗さんもまた、「交換日記やメール、警察への陳述書」などをすでに読んだとここに記している。つまり彼は、事件の経緯や背景を示す相当量の情報に接している。にもかかわらず、「なぜ」という問いが解消されていない。

それはどうしてなのだろう。どうして与えられている言葉や情報は、「なぜ娘が彼女に殺されねばならなかったのか」という問いに答えることができないのだろう。

そして、「なぜなのかを教えてほしい」というこの願いに、あなたならどう応えることができるだろうか。

もとより、この事件は理解不能な不可解な事件なのだろうか。あなたは加害者の心の中にあつたことを、その行為の理由を十分に理解できると感じるだろうか。それとも彼女の行為は、まったく理解の範囲を超えたふるまいなのだろうか。

あなたは思うだろうか？

たまたま教室に居合わせた学生たち（男性 22 名、女性 5 名、計 27 名）のラフな意見を求めただけのこのアンケートが何かを代表するデータとしての価値をもつわけではない。しかし、この問いに対して返された回答を読んでいくと、そこには、この「事件」を人々が言語化し、認知的に処理していく手順——これを、出来事に対する「言語的態度」とでも呼べるだろうか——の一パターンが浮かび上がってくる。その限りにおいて、2005 年 10 月 17 日の時点でこの講義（法政大学第 2 部

社会学部「社会学原論」)に出席していた学生たちの返した答えは、次のような構図に整理することのできるものであった。

(1) 「どこにでも起こりうる出来事」。

まず、少なからぬ回答者が、この事件はまったく「理解不能」なものではない、と答えている。「事件」は、「起こりえない不可解なこと」というよりは、どこにでも起こりうる「普通」の出来事のひとつである。

①理解はできないが、起こり得ない不可解な事件ではなかった、と思います。

②この事件はまったく理解不能な事件ではないと思う。小学生が生きているせまい世界で、友達は学校の友達以外にはあまりいない。そういう中で憎しみの感情は、大人が思うよりも大きいものであると思う。

③そうした少女を理解できるか? / 答えは YES。正しいとも思わないし、認めるつもりもないけれど、彼女の殺人はそれほど意外なものとも思えない。/ 個人の「心の闇」に還元できるような穏やかなものとも(僕たちと関係のないこととも)思わない。/ これが、この社会/世界が作り出したこの世代の「普通」のこと。「普通」の女の子。

(2) 「なぜ殺さねばならなかったのか」については、「理解しきれない」。

しかし、加害者の少女がなぜ「最後の一線」を越えて「殺人」に及んでしまったのかについては、「理解しきれない」という声が多い。

④一般的に考えれば、まだ十代前半の子供であれば、トモダチ同士でケンカしたとしても、何日間か口をきかなかったり、最悪、絶交という状態になったりするケースもあり得るが、所詮子供たち同士では、その程度におさまるものだと考えられる。意見陳述にも書かれているように、人を殺すということはたやすいものではない。その殺すという一線を越える理由を理解し説明するということは難しいと思う。

⑤私も小学校の時、嫌いで「死んじゃえばいいのに」と思うクラスメートはいた。「殺してやりたい」ということもあった。でも、実際に殺したりなんてしなかった。/ それは当然の様に「人を殺してはいけない」「人を殺したら今まで通り平穏に暮らしたりできなくなる」と解っていたからだし、大体どんなに腹が立つことがあったって、実際命を奪ってしまうほどの重大なことではなかったからだ。

(3) 行為の理由を表現する言葉探しは「不毛」、「徒労」である。

そして、その最後の一線を踏み越える「動機」を言いあてる言葉探しは不毛である、とされる。ふと「一線を越えてしまった」、「ハードルを越えてしまった」、ただそれだけのことであり、その理由は誰にも、本人も含めて語りようがない。したがって、「動機探し」は虚しい、のである。

⑥私は加害者の行為の理由を十分に理解することができない。殺害のきっかけとなる出来事が多

すぎる。何がきっかけかなんて決められない。彼女がこれまでに経験し、感じたもの全てが複雑に関わっていると思う。彼女自身も殺害時に、今自分は何を考えて行動しているかなんて確認するはずもない。だからどんなに殺害の経緯の情報を持っていても彼女が本当に何を思っていたかなんて誰にもわからない。「なぜ」の質問には答えられない。

- ⑦私がこれらの記事を読んで思うことは、この加害者の児童には明確な動機がなかったのではないか、ということだ。確かに、被害者の児童にインターネット上で悪口を書かれたことなどが動機として挙げられているが、それは表面的な理由で、説明できる動機はなかったのだと思う。

(4) この事件を説明することのできるさまざまな「背景的」要因がある。

他方で、インターネット上の人間関係、閉塞的な少数の人間関係、しつけ方・親の関わり方、生育環境など、この事件を説明することのできる背景的諸条件について、多くの言葉が学生たちによって語られていく。

- ⑧私はインターネットの書き込みがポイントではないかと思います。例えば「ありがとう」という言葉を直接口で伝える方法、手紙に書く方法、メールで伝える方法の3つがあったとして、1番相手に気持ちが伝わるのは、やっぱり直接口で伝える方法だと思われます。それに対してメールの文字は絵文字をつけない限り、とても無機質で機械的な冷たいものようになってしまいます。友達同士でふざけ合って「バカだなあ」なんていう場合もメールで「バカ」と書かれると、その本意も裏側にある気持ちも相手にはまったく伝わらず、「バカ」は「バカ」以上の意味を持たない単なる中傷する言葉でしかありません。／この事件の場合も、定かではないけれど、もしかしたら親しみを込めて“あいつは仕方ないなあ”くらいの意味合いで書いた言葉が、パソコンを通じて文字として表れた時に暗く陰湿に感じて犯行に及んだのではないかと思います。加害者と被害者の仲が（昔は）良かったなら、なおさら言葉が重くのしかかり、裏切られたという気持ちも強かったのではないのでしょうか。

- ⑨この事件は、新聞記事やニュースなどにおいて、(あとになってから) 色々な原因や背景などについてとりあげられていましたが、私は加害者が感情を発散するということを学習できていなかったということ、そして、加害者とその両親が人間関係（親子関係）を構築することができていなかったということ、この社会に存在するありとあらゆる情報（とりわけドラマやインターネット掲示板）が悪影響として加害者の心に浸透してしまったため、このような事件が発生してしまったのではないかと考えています。／この加害者は、第一反抗期においてもほとんど自己主張することはなく、どちらかといえば“育てやすい”子供であったようです（別の新聞記事には書かれていたような憶えがあります）。したがって、すでに述べたように、感情を発散するというをほとんど知らぬまま、学校生活を経験することになってしまったのです。

こうした学生たちの回答は、全体として見れば、きわめて冷静で、バランスのいい態度を示しているといえるだろう。そこには、事件に対するエモーショナルな反応も露出してこない。事件とそ

の加害者を特異なものとして扱おうとするある種の報道言説への批判的な距離も保たれているし、短絡的な「動機探し」の請求に対しても、その可能性について冷静な吟味がほどこされている。その上で、事件を生み落とした状況を説明するような多くの情報が取り込まれ、これが簡潔に整理される。社会学部の学生らしい、「リテラシー」を感じさせる回答ぶりである。

しかし、視点を変えて見れば、これらの語りは、行為の「動機」それ自体については結局「理解しがたい」ものとして括弧にくくり、これを代替する二次的な知識の援用によって、出来事を認知的秩序に包摂しようとしている。その点において、先に見た「報道言説」と相同的なパターンを示すものでもある。少なくともその言葉の中には、直接に動機を語ろうとする姿勢は顕在化してこない。「どこにでも起こりうる」出来事として事件を受け止めながら、最後の一線を越えてしまう理由——行為の構築的原因——を語る過程はスキップされてしまうのである。

こうした「動機を語る言葉」の欠落は何に由来するのだろうか。それはこの少女のふるまいがどうしても「理解しがたい」性格をもってあらわれているからなのか。それとも、これを受け止める「私たち」の言語的態度において、ある種の回避がなされているからなのだろうか。

5. 少女にかわって「なぜ？」に答える

こうした苛立ち紛れの疑問を放棄しきれず、また別の教室（法政大学 1 部社会学部、「社会学理論 I」、2005 年 10 月 21 日）において、類似の問いかけを、少しだけ形式を変えて試みることにした。学生に提供した資料はまったく同一。ただし、「問い」の最後の一節（***以下）を次のように書き改めてみた。

さてここで、今あなたが「加害者の少女」であったとしたら、そして「御手洗さん（被害者の父親）」に対して、「なぜ自分が怜美さんを殺したのか」を説明しなければならなかったら、あなたはどんな風に「行為の理由」を言葉にするだろうか。

「あなた」が「加害者」であると仮定して、したがって「一人称」で（「私は…」）、「なぜ怜美はあなたに殺されねばならなかったか」という問いに答えなさい。

ここで「一人称」で答えよという制約を付したのは、前の教室での回答に見られたような、「適切な距離」からの解説ではなく、より直接的な動機の言語化を強制したかったからである。

問いに対して、提出された回答は 66 通。男性 33 名、女性 32 名（性別未記入 1 名）であった。

ここでの問いに対する学生たちの回答は、上に見たアンケートのそれとは、明らかに別様の言葉を語りはじめる。もちろん、そのすべてが、ではない。新聞その他の提示する情報を並列して、「だから殺した」というだけの回答も、逆に何らかの心理学的概念（例えば「ルサンチマン」）を援用して、「心」のありようを解説しようとする回答も少なからずある。しかし、回答者のある部分は、きっかけとなったとされる出来事（インターネット上のトラブルなど）から行為（殺すということ）

へといたるプロセスに自分自身の視点から言葉を与えようと、さまざまな苦慮を示す。そしてその試みは時に、(少なくとも「私」にとっては) 相応の説得力をもつ物語を提示しはじめる。恣意的な抽出ではあるが、そうした回答例をいくつかピックアップしてみよう。

【受講生の回答】(抜粋)

- ①あの時、私と怜美さんは友達ではなかったと思う。はた目にはそう見えても、私にはそう思えなかった。私にとっては敵だったのかもしれない。私の中の何かを壊すもの、だったのかもしれない。だから彼女を殺してしまった。(・・・)あの時までには、「殺す」という方法こそ、私が私でいられるための唯一の方法だったのです。(男)
- ②何故なら彼女は私の心の根本的な部分を深く傷つけたからです。その傷は彼女が生きていては決して癒えることのない種類の傷です。私とその傷を抱えて生きていくことはできそうもありませんでした。(男)
- ③何で殺しちゃったかって言うと、もう今の状態で居続けるのがイヤだったからです。毎日毎日学校へ行くのがいやで、怜美さえいなければ、皆だって従う人がいなくなって、グループとかなくなるんじゃないかと思ったし。殺したら自分がどうなるかとか考えなかった訳じゃないけど、でもそれより今の状態にいる事のほうが辛かったから。その後どうなっても今よりはマシだって強く思った。だから殺したの。(女)
- ④嫌なことがあった。生きてるのがつらくなった。死にたいと思った。大切なもの(自分)を失うとどうなるのか、理解(知るではなく)したかった。だから、一番近くにいる大切な友人、怜美、つまり本当の自分を殺すことで理解しようと思った。でも怜美が死んだら(死を理解したら)自分を殺せなくなってしまった。つまり、自分を殺したかったから怜美を殺しました。すみませんでした。(性別無回答)
- ⑤この状況から抜け出すためには、彼女を殺すこと、それしか思いつかなかった。「そんなことをしたらどうになってしまうのか？」こう考えなかった訳じゃない。考えられなかった。毎日が窮屈でHPとかある意味、現実とは違う世界にいることが心地よかった。その大切にしていた世界さえ奪われてしまうのではないかと怖かったのかもしれない。自分の生きていける場所がなくなってしまうようで・・・。(女)
- ⑥とにかく、今も、彼女を殺してしまった理由を断定することができません。でも、自分が生きる上で、怜美さんは邪魔な人間なんだって…思っていました。(男)
- ⑦私をこんな不快な世界に閉じこめてしまった怜美がいなくなれば、私の世界はもっと明るいものになると思ったから。／私と怜美は仲が良かった。良く遊んだし、良く一緒にいた。私の生活は既に学校やクラスっていう狭い世界の中におしこめられてたけど、その小っぼげな世界が私のすべてで、そこで起こる小さなことは私にとって大きなことだった。怜美とは一緒にいる時間は長かったけど、お互いがお互いを理解してるって感じではなくて、お互いに気に入らないところをみつけては、関係がイガイガするかんじだった。でもお互いお互いのことは一番

考えてたかもしれない。だから表面的な付き合いってわけではなかった。むしろ私と怜美の中で起こること、そこで覚えた感情は、私の小さな世界の全てだった。うまく言えないけど、息苦しくて、でもどこにもいけなくて、逃げるとこなんてなくて、どうしようもなかった。だから、怜美がいなくなれば、この世界は変わるんだと思ったんだ。／この重くて狭くて小さな世界から、抜け出せると思ったんだ。(女)

- ⑧私は怜美ちゃんに会う、怜美ちゃんと一緒に時間を過ごすのが苦痛だったのです。怜美ちゃんと会えば、また相手の裏の気持ちを読んで、読もうとして嫌な気持ちになるし、快く時間を過ごせないのです。別に怜美ちゃんが憎いとか嫌いではないのです。でも私は学校には行かなきゃならないし、怜美ちゃんが学校に来なければいい、HP に書きこまなければいい、と思ったのです。憎いから殺してやろうと思ったのではなく、怜美ちゃんをいなくするには殺すことが方法だったのです。そうすれば快く学校生活を過ごすことができたのです。楽に毎日過ごすことができたのです。(男)
- ⑨怜美を殺すまでは、この問題は二人の間に起きた事だから、ただ単純に怜美の存在がウザくて、周りの事など考えず、ただいなくなっただけでよかった。殺したのは怜美の存在をなくするための一つの方法であって、いなくなればなんでもよかった。自分で殺す事が一番早いと思ったのかも。殺すことに関してはためらいはなかった。人を殺す事ができるという一面も、私自信 [自身?] であったと思う。(男)
- ⑩彼女の存在が私の中で大きくなりすぎたから殺した。彼女の嫌な部分が私の中で大きくなっていき、親しみも全て憎悪に変わり、心のうつわからあふれだしてくる。殺した後の今は不思議なくらい心が落ち着いている。嫌なものは消えたから。(男)
- ⑪ (・・・) 今回、怜美さんを殺してしまったのは、私という存在に立ち入ってほしくない所まで、彼女が [足を?] 踏み入れ、私の領域を壊そうとしたからです。友達であっても、限度というもの、人と人としての境界線について、怜美さんは無知だったんだと思っていました。(女)
- ⑫私は怜美さんとはずっと仲が良く、私たちは親友だと思っていた。／怜美さんは私の事を一番分ってくれていて、私も怜美さんを一番分っていると思っていました。／怜美さんはいつも私の望んだ答えをくれていて、私もいつも怜美さんが望んでいる答えを出していたと思っていました。ただある日、怜美さんは私を裏切ったんです。私のたった一人の味方、もう一人の私であった怜美さんが突然私を裏切ったんです。信じていたのに。どうしてか今でも分かりません。／何故怜美さんが私のことを「ぶりっこ」などと、私が一番嫌う、あのクラスの間人たちと同じ様に呼ぶのか信じられませんでした。怜美さんの目に私もあのクラスの間人たちと同じ様に写るのかと思うと信じられませんでした。／私は怜美さんのことをアノ人間達とは違う、私と同じ人間だと思っていたのに。そんな時、私は、私をアノ人間達と同じ様に見なす怜美さんにひどく怒り、反対に恐怖を覚えました。今の怜美さんは以前の怜美さんとは違うモノに思えました。／以前の私に戻りたい。そう思った時、今の怜美さんの存在がとても私には障害に思えました。私は断じてコノクラスの間人たちとは違う、変わったのは私じゃない、私を「ぶ

りっこ」だなんて呼ぶ怜美さんの方が変わってしまったかの様に思えたんです。／だから、以前の私と怜美さんを取り戻すために、私は怜美さんを殺してしまいました。(女)

⑬(…)ただでさえサイテーなクラスなのに、あの女がいるせいで、毎日死にそうだった。／死んじゃえばいいのに。そう思ってた。／だけど実際には死んでくれない。だから殺そうと思った。／おじさんにしてみればかわいい娘かもしれないけど、私からしたらサイテーな奴でしかなかった。／HPに私のこと「ぶりっ子」とか書いてたけど、あいつこそぶりっ子だと思うよ。／私のこと嫌いながら、仲良いフリしてるんだよ。ありえねー。／こんな女この世からいなくてけっこう。／だから殺しました。／ごめんね。おじさん。(女)

⑭何で殺しちゃったりしたんだろう。でも、あの時は仕方がなかった。殺したくて仕方なかった。冷静だったつもりだ。いっぱい悩んで、考えて、それで、殺したくてしかたなかった。あの子がいなくなればいいんだと思った。簡単なことだと思った。あの子がのうのうと生きているのが気にいらなかった。それだけ。(女)

⑮私はなぜ怜美さんを殺したか。／私の周りのことが本当に何もかも気にいらなくて、怜美さんだけではなく、クラスの子のほとんどが消してしまいたいほど憎かった。／私だけは周りのやつらとは違う人間なのに、毎日が同じように繰り返して過ぎていって、いらいらした。／怜美さんを殺せば、無力な自分と私の周りの憎らしいやつらがすごく変わると思った。／怜美さんじゃなくても良かったと思う。今までと違う世界にしたかった。(女)

⑯なんで？って訊かれても、ウザかったからとしか答えられないんだけど。あたしのことをぶりっ子とかいって、お前はなんだっつーのみたいな、何様だっつーのみたいな？で、マジウザイから殺した。むしろ消した、みたいな。(…)うん、今はね、やんなきゃよかったかなって思ってるよ、しょーじき。服は血だらけになったわ、ケーサツつかまるわ、頭イっちゃってるヒト扱いされるわで、いいコトないしね。ウザすぎ、マジ死ねって思ったから殺しただけなんだけどね。(男)

多数の学生が集う教室で、匿名で提出された「回答」は、時に軽はずみで、時に「偽悪的」なトーンを帯びる。それをむき出しのままに提示するのは、いささか配慮を欠いたふるまいであるかもしれない。しかし、少なくともここには、「なぜ殺したのか」を直截に語ろうとする言葉がある。もちろん「回答者」はそれを強いられたからやっているにすぎないのであるが、それでもそこには、与えられた環境と生じたきっかけ(起動原因)から、行為(殺人)へといたる理由(構築原因)を、自分自身で了解できるようつながりの中で再構成しようとする姿勢が見いだされる。そのような言語的態度から発せられた言葉のサンプルとして、これらの回答を位置づけておきたい。

もちろん、これらの回答が示しているものは、限られた情報をもとに、かつ無責任に語られた物語にすぎない。これは、ある大学の教室に集まった者たちの紡ぎだす「集合的イマジネール」であり、それが何がしか「事件」の真相に迫るものであるとか、子ども達の「リアリティ」を映しているといった主張は慎まれねばならない。しかしそこに、決して了解不能ではない「物語」が構築さ

れていることもまた、ひとつの言語的な事実である。

そこで、まずは回答において用いられた「語彙」に着目して、これを編集し直してみよう。

上に挙げたサンプルを読み直してみると、そこには、共有されたいくつかの特徴的な言葉遣いがあることに気づく。

- (1) 「存在」に関わる言葉／「殺人」を表現する言葉
「いる」「生きる」／「いなくする」「消す」
「あの子がいなくなればいいんだ」
- (2) 「世界」(＝学校)に関わる言葉
「現実とは違う世界」「学校やクラスという狭い世界」「この世界は変わるんだ」
「今までと違う世界にしたかった」
- (3) 「他者」(脅威としての他者)に関わる言葉
「敵」「私の中の何かを壊すもの」「私の心の根本的な部分を深く傷つけた」
「邪魔な人間」「彼女の存在が私の中で大きくなりすぎた」
「私の領域を壊そうとした」「今の怜美さんの存在がとても私には障害に思えました」
- (4) 私という「存在」の確保、私の「生存」に関わる言葉
「私が私でいられるための唯一の方法」「その傷を抱えては生きていくことはできない」
「自分が生きる上で」「私という存在に立ち入ってほしくなくて」「以前の私に戻りたい」
- (5) 「世界からの脱出」に関わる言葉
「この状況から抜け出すためには」「どこにいけなくて、逃げるところなんてなくて」

こうして提示された語彙を用いて、私たちは、ひとつの殺人の物語を語るができる。そのプロットは次のように提示されるだろう。

「逃げるところのない世界」で、
「私という存在の中に入り込み、私の中の何かを壊そうとする」他者があらわれ、
「私が私のまま生きのびる」(またはその状況を抜け出す)ためには、
その他者を「消して」、「世界」を新しく作り出すしかない。
「だから殺したの」、という物語。

この物語はおそらく、少なくとも一定数の学生たちには「了解可能」なものとなっている。そう
いって言いすぎであれば、「了解可能性」を問うるものとして、物語は差し出されている。そして、
これを語るためには、この「少女」の特異な性格的特性などは、一切混入されなくともよい。そう
した「行為主体の心理学的属性」に言及しなくとも、誰もが遭遇しうる「状況－きっかけ－行為」
の連鎖の中で理解できるような出来事として、この事件は語られうるのである。そうであるとすれ
ば、事件は、他者(＝私たち)の視点から見て、決して「わけのわからない」出来事ではない。少

なくとも、その行為の動機を物語る言葉を、私たちは、日常化された言語の中に探し求めることができる。確認されるのは、このささやかな事実である。

6. 他者の動機を語るということ

しかし、そんな第三者の視点から、無責任な「動機の語り」を提示することはいったいどれほどの意味があるのか。それは、手前勝手な解釈格子の中に他者の行為を取り込み、共同性の幻想を強化するだけの、無益な言葉遊びに終始するのではないか。おそらくそうした問いが提起されうることだろう。

事件の真相を明らかにすることを基準とすれば、ここに示された「物語」が何の役にも立たないことはいうまでもない。その背景にある「子どもたち」のおかれた状況を理解する手段としても、きわめて疑わしい推論の素材しか提供していない。にもかかわらず、こうした「言葉遊び」に興じることに意味があるとすれば、それは、「私たち」がここで語りうる物語に真実が含まれていると主張することのうちにではなく、ある他者の行為を「わけのわからない」ものと見なし、その了解不可能な存在の出現を説明する特異な言語に他者を委ねてしまう前に、これを別様に語る可能性が開かれているのだと気づくこと、その小さなきっかけを提供することにある。

もちろん、そうであるとしても、この言葉遊びは結局、「他者を語りうる我々」の権能を誇示し、確認することにつながるのだというべきかもしれない。了解可能な物語のうちに他者の動機を再構成するということは、確かに、共通の文化（例えば、解釈コード）を有する人々の世界に、他なる者を回収しようとするふるまいである。しかしながら、その企ては、その行為を容易には「語りきれない」という経験とともに、「我々」の文化に対する他者、「侵入者」（リンギス）としての他者に遭遇する契機ともなりうるだろう。

例えば、ひとりの学生は、上に見た回答 (12) の余白に、次のように書き加えている。

ここまでで限界です。何で殺したのか、やっぱり理解できませんでした。だって、普通はここまで思っても、実行には移せないと思うし……

与えられた情報を手がかりに、ひとつの物語を語ってはみたものの、結局のところ「最後の一線を越える」「動機」そのものは理解できなかつたと、この回答者はさじを投げている。しかし、はじめから「もちろん僕にもよくわからない」といって、「動機の語り」をスキップしてしまうことと、「語ろうとして語りきれない他者」を確認することとのあいだには、微細ではあっても、決定的な落差がある。おそらく、「社会的 social」という形容詞に値するだけの関係が生まれるか否かは、この両者を分かつ一線にかかっている。その「動機」を問う可能性をもたないものとして「他者」を位置づけてしまった時点で、その人間は<顔>（レヴィナス）をもって「私」の前にあらわれることがない。「わけがわからない」ことを自明の合意として「動機理解」を割愛する限り、「私」は決して<他者>に出会うことができないはずである。

おそらく、動機を語る言葉を、あらかじめ学習され、共有された「語彙」として位置づけてしまったのは、ミルズの理論構成上の不備である。なぜなら私たちは、事前に準備された解釈コードを適用するだけでは語りえないような「他者」の「侵入」の場面においてこそ、その「動機」を語る必要性に迫られるからである。動機をめぐる語りは、「語彙」の不備においてこそ浮上する課題だといえるだろう。

しかし、他方でミルズは、動機とはまず他者によって語られるものであることを、的確にも指摘していた。行為を呼び起こす「心」のありようを語る上で、「私」(＝行為者本人)は、決して特権的な存在ではない。他者によって語られ、その語り口を学ぶことによって、人は「動機」なるものを学習する。他者の言葉を聴き、受け取る場所からしか、自己を語る言葉は生起しえない。そうであるならば、ある行為の主体が、「動機」を語る言葉を失って立ちすくんでいる時には、まずは他者から物語の口火を切ることもできるのではないだろうか。たがいに言葉を共有しない者たちが遭遇する機会が、そこから開けていくはずである。

【註】

- 1) 例えば、三原芳一(2006)は、著作の冒頭において次のように記す。「近年、少年によるいささか理解しにくい『凶悪事件』がさかんに報道されるようになったが、そのたびにさまざまな評論家がマスコミ上に登場し、犯行の動機や背景を解説してくれる。近年の少年犯罪について、まとまった評論やルポルタージュが出版されることも少なくなく、ほとんど出版界の流行現象といっても過言ではない。こうした現象が起こるのは、言うまでもなく、少年による近年の『凶悪事件』が理解しにくいものであるだけに世の中の不安をかき立てるからであるが、そのことによってさらに、その対策が『政治問題』化したからである」(3)。
- 2) 宮台真司は、やや別の視点から、この覚醒した認識を次のような言葉遣いで表明している。すなわち、「『動機探索』に意味があるのは、その行為の『敷居が高い』場合だけ」であり、「敷居が低ければ雑多な動機が引き金になる」。実際、彼が「脱社会的存在」と呼ぶ少年たちは、「万引きと同程度の些細な動機で人を殺せる」。したがってこの時、「『動機探索』は処方箋に一切結びつかない」。重要なことは、「人を殺すことの敷居が何ゆえにかくも低くなったか」にかんする「学問的考察」だけであり、行為の引き金要因をいくら探ってみたところでどこにもたどり着けない、のであると(宮台・速水 2000: 2)。
- 3) 『毎日新聞』、6月2日(水)朝刊「ネット掲示板でトラブルか」、6月3日(木)朝刊「組替えなく『密室』化」、夕刊「TVドラマで実行決意」、6月4日(金)朝刊「『ぶりっこ』書かれ立腹」の各記事コピー。

【文献】

朝日新聞西部本社編, 2005, 『11歳の衝動 佐世保同級生殺害事件』雲母書房。

土井隆義, 1988, 「犯罪動機の知識社会学的考察ーラベリングパースペクティブと動機付与論」『ソシオロジ』

103号。

- , 1988, 「刑事司法過程における犯罪動機の構成」『犯罪社会学研究』13号.
- , 2003, 『<非行少年>の消滅—個性神話と少年犯罪—』信山社.
- Dretske, Fred, 1988, *Explaining Behavior, Reasons in a World of Causes*. (=水本正晴訳『行動を説明する因果の世界における理由』勁草書房, 2005年.)
- 藤川洋子, 2005, 『少年犯罪の深層—家裁調査官の視点から』ちくま新書.
- Gerth, Hans H.& Charles Wright Mills, 1953, *Character and Social Structure*. (=古城・杉森訳『性格と社会構造』青木書店, 1970年.)
- 浜田寿美男, 2005, 『子どものリアリティ 学校のヴァーチャリティ』岩波書店.
- 井上俊, 1997, 「動機と物語」『現代社会の社会学』岩波書店.
- 小谷敏編, 2003, 『子ども論を読む』世界思想社.
- 伊那正人, 2003, 「少年事件をめぐる言説—『岡山バット殴打事件』の報道を読む—」小谷敏編『子ども論を読む』世界思想社.
- Lévinas, Emmanuel, 1961, *Totalité et infini, Essais sur l' extériorité*. (=熊野純彦訳『全体性と無限』岩波書店, 2005年.)
- Lingis, Alphonso, 1994, *The Community of Those Who Have Nothing in Common*, Indiana University Press, (=野谷啓二訳『何も共有していない者たちの共同体』洛北出版, 2006年.)
- 前田泰樹, 2005, 「行為の記述・動機の帰属・実践の編成」『社会学評論』Vol.56, No.3, 日本社会学会.
- 三原芳一, 2006, 『少年犯罪の心的ストーリー』北大路書房.
- Mills, Charles Wright, 1963, *Power, Politics and People*, (=青井・本間監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 1971年.)
- 宮台真司, 1997, 『透明な存在の不透明な悪意』春秋社.
- 宮台真司・速水由紀子, 2000, 『サイファ覚醒せよ!』筑摩書房.
- 西川珠代, 1991, 「社会学における『動機』概念の変容」『ソシオロジ』111号.
- 大泉実成, 2005, 『人格障害をめぐる冒険』草思社.
- 岡崎勝・保坂展人, 2005, 『佐世保事件から私たちが考えたこと』ジャパンマシニスト.
- 作田明, 2005, 『現代殺人論』PHP新書.
- 芹沢俊介・高岡健, 2004, 『殺し殺されることの彼方』雲母書房.

(すずき ともゆき 法政大学社会学部)